

あの日々を わすれない

— 太平洋戦争と都城 —



令和2年7月4日（土）～10月11日（日）

「わたしが聞いた
戦争の体験談」集



（所蔵：都城市立明道小学校）



「わたしが聞いた戦争の体験談」集について

2020(令和2)年は、太平洋戦争終結後75年という節目の年です。

この節目に合わせ、戦争の悲惨さを記録し次世代に受け継いでいくため、都城歴史資料館において企画展「あの日々をわすれない～太平洋戦争と都城～」を開催しました。また、同企画展開催に合わせ、都城市での戦争にまつわる体験談等を、令和元年12月から同2年2月まで若い世代の人々に聞き取ってもらい感想とともに募集しました。

集まった体験談と感想を、ぜひ多くの方々にごらんいただき、戦時中の都城市の様子を知っていただくとともに、次代をになう方々の平和についての思いを感じ取っていただければ幸いです。

最後に、体験談の募集にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

令和2年7月

都城市教育委員会

内容

「なくなりそうな命」	2
「戦争体験」	2
「戦争での話を聞いて」	3
「おばあちゃんから聞いた話」	4
「都城の空襲について」	4
「戦争のつらいこと」	4
「ひいおばあちゃんの体験談」	5
「祖母から聞いた話」	5
「じいちゃんのお兄さんが戦争に」	7
「すべてが奇跡の命」	7
「恒吉さんの戦争体験」	8
「安藤高幸さんの戦争体験」	9

【掲載内容について】

戦争体験談及び感想は、ご応募いただいた体験談等のうち、公表をしても良いとご回答いただいた方のものを、公表してよい範囲で掲載しています。また、記載している年齢等はご応募時点での情報です。漢字などの表記は、ご応募いただいたものをそのまま掲載しています。

なお、この冊子に掲載している内容は、市の平和啓発事業に用いることを条件として寄せていただいているものですので、複製は固く禁止いたします。

「なくなりそうな命」



戦争中、ぼくのひいおばあちゃんは畑に囲まれた家に住んでいたそうです。ひいおばあちゃんは、豆ふを作る人でした。

ある日、兵隊さんが来てひいおばあちゃんの家に住むことになりました。兵隊さんを家に住ませてから少したったある日、飛行機が飛んで来て、家におかってじゅうをうったそうです。今では、もうないけれど穴があいてしまったそうです。

このような危ないこともあったけれど、何とか生きのびたようです。

食事は配給制だったけど、田舎は、きびしくなかった言っていました。

【感想】

ぼくが一番きになったのは、(体験談を聞いて)食です。社会の学習では配給制できびしかったことを習ったけど田舎はきびしくなかったということにびっくりしました。写真を見てみんなしんげんにやってるなあと思いました。



(聞き手:安久小学校 12歳 武田好晟)
(体験者:山下キミエ 96歳)

武田さん提供の写真
(昭和16年頃の撮影ではないかとのことです)



「戦争体験」



これは祖母から聞いた話です。

祖母は五才のころに終戦でした。ある日 B-29 が今のイオン早すず店がある辺りにめがけて、ついらくしたと言います。それはおそろしかったものだと。祖母は今すぐ防空ごうにかくれました。

ドドーン

そんな音が鳴りました。その前に女の人の声が聞こえたと。

「助けて！助けて！お願い！防空ごうに入れて！早く！キャー！」

しかし、祖母は空けなかった。それは、十五人ほどいて、まだ入れたが、空けなかったのは、自分も、そして仲間も、死んでしまうからだ。十分たったころだろうか、戸を空けると、女の人は…死んでいた。祖母は B-29 が落ちたあたりに行くと、右手がなくなった女性がいきました。祖母はおそろしくなったと言っていました。その女性は中郷中へ運ばれたという。しかも木でつくられた担架で。祖母はアメリカ人に文句を言った。

「なんであんなことするの！かわいそうだからヤメテ！！」

こう言うと、そのアメリカ人は、頭をつかんでぐるぐる回した。なわとびみたいに…。

時は流れ平成3年。右手をなくした女性と会ったと言う。しかもあの時の。声をかけると、

「ありがとう。ありがとう。覚えててくれたんだね。」

なみだをこぼして言った。しばらく話を聞くと、国からお金は出なかった言っていた。

～あとがき～

ぼくはこの話を聞いて、とても心がいたくなりました。今、この地球でもどこかで戦争がおこっているのです。同じ人としてそのようなこと許せますか？許せませんよね！？水道をひねると水が出る。お腹がすいたらお菓子やご飯が食べられる。勉強ができる。あたりまえ。では、ないのです。ほら、「いま」ぼくがこの文章を買っているのも、あなたがこの文章を見ているのも、あたりまえじゃないんです。「いま」「過去」「未来」…。いまできることを精いっぱいやってみるのはどうですか。そして、自分にできることをさがしてみてください。努力すれば良い結果になるとは限りません。しかし、チャレンジできたことに素晴らしいと感じてください。日本は、戦争からもうすぐ七十五年がたちます。あなたはそんな日本がすごいとおもいませんか。いいえ、これがあたりまえなのです。人々の中にはすごいと思う人はいるでしょう。しかしぼくは、あたりまえと思っています。なぜなら、争いごとがあるのはいいんですが、人を「死」の道に向かわせるのはだめだと思うからです。長くなりましたが以上とさせていただきます。

(聞き手:12歳)

「戦争での話を聞いて」



ぼくは、戦争のことについて、まず最初思ったことが2つあります。1つ目は、つらいということです。中学生になると、陸軍から教官が来て、訓練をさせられるということです。どれだけつらくても、歯をくいしばって訓練しているからです。高校生になると、戦争がはげしい時は、戦争で戦いに行っているんで、自らが、働かなければならないからです。そして2つ目は、怒りです。空襲があるたびに、ぼうくうごうに入り、地を見わたすと家が焼かれB-29が来ると、一しゅんで人が死に、家族が死に、動物が死んでいきました。一方、戦争に行っていた人たちも、アメリカ軍に殺されていきました。でも、この出来事で、ぼくはかんたんにつらいという言葉は言っただけでいいかなと思いませんでした。それは自分のほかにもっと苦しんで、つらい人がいるからです。これからは、もっと自分に強くならなくてはならないと思いました。そして自分はめぐまれていることをあらためて思いました。

【感想】

ぼくは戦争の時の人はぼくよりとても苦労したりしていることを知って、もっと自分の心をきたえようと思いました。

(聞き手:安久小学校児童 12歳)

「おばあちゃんから聞いた話」



わたしのおばあちゃんは、戦争の最中で生まれました。幼いころだったのであまりおぼえてないのですが終戦も近くてきが攻めてくるからうら山ににげるよう家ぞく全員をひなさんさせたそうです。

おばあちゃんは、下のいもうとと弟の手をにぎってうら山に必死で逃げたのを覚えているそうです。おばあちゃんのおばあちゃんに連れられて米軍の飛行機が落ちていたつばきと言うところへいったそうです。おそろおそろひ行機を見たそうです。そして、そこには黒こげた人がすわっていました。今でも時きたまその米軍さんの横顔が夢にでてくるそうです。そのころのおばあちゃんの年は6才でした。

飛行機の回りの草原は、やけ野原だったそうです。飛行機はボロボロで見るかげもない。木も草もなにもかもない。戦争なんて二度とやってはいけないと心から思ったそうです。わたしもそう思います。これがおばあちゃんから聞いた戦争の話です。

【感想】

おばあちゃんの当時の年れいは6才、今のわたしより年下です。それなのに死体に見せられないといけないうんて気がくるいそうです。米軍さんもかわいそうで本当に戦争なんておろかでもう二度としてはいけないと思いました。

「都城の空襲について」



- 昭和20年（1945年）3月18日の西飛行場への“空襲が”始まり。

→〔断続的に空襲が続いていた都城…〕

↓

だが、広島に原子爆弾が投下された。

（8月6日）“大空襲を受けた”

※正午過ぎから始まった空襲。市街地の西部地域に焼夷弾を投下した→ 第一波

※消火活動の妨害のための機銃掃射を繰り返した攻撃まで続いた。→ 第四波

○松元・八幡・牟田・宮丸・姫城・大王・上町・中町・前田・平江・小松原の各町が“焼失” →〔…52人が犠牲…〕

「戦争のつらいこと」



- 都城病院にB-29が爆弾を落として、たくさんの人がやけどをして、その人をリアカーにのせて三股方面ににげてきた。
- 畑仕事をしているところに爆弾が落ちてきてその爆弾は不発弾でじいちゃんの命は助かった。
- 仕事をして防空ごうの中に行ったり出たりして仕事をしていた。

- 電灯は黒い布をかぶせて昔の人は明かりをつけられなかったそうです。明かりはあるとB-29が飛ぶからこわかったそうです。
- 卒業式も防空ごうに行ったり出たりして卒業証書をもって終戦をむかえました。
- 男の人は戦争に行って学校に行ったけど近所の仕事の手伝いで勉強ができなかった。

【感想】

体験談を聞いて戦争が辛いことはわかってはいたけれど体験した人の話を聞いて、辛いことがもっとわかりました。今のくらしとぜんぜんちがい明かりをつけられなかったことをはじめて知りました。

「ひいおばあちゃんの体験談」



私の母方のひいおばあちゃんの体験談です。

田植の後草取りをしていた時に、B-29というアメリカの飛行機が、突然飛んで来たそうです。その時に、身を守るために、田植を終えたばかりの田んぼに体を全部伏せたそうです。どろだらけになりながら、家にいる子供達を思い命を落とすかもしれない恐怖を感じたと母が小さい頃によく話をしていました。

戦時中のある日の夜、突然アメリカ兵が2人家に来たそうです。何かを話していたけれど、言葉が分からないから、家族を守るために子供達をかかえて部屋のすみっこにうずくまるようにしていたそうです。そのアメリカ兵は、家の中を見わたして、何もせずに帰っていったそうです。その日の夜以降は、電球の明かりが外にもれないように布のような物をかぶせて、暗い所でご飯などを食べていたそうです。その時も恐怖を感じたそうです。

【感想】

田んぼに体を伏せたと聞いて、自分の命を守るために必死だったんだなと思いました。また、家に入って来たと聞いて、私だったら泣きさけんでしまうだろうと思います。ひいおばあちゃんは勇気がある人だなと思いました。

(聞き手:安久小学校 12歳 稲田璃咲)

(体験者:田平トモ)

「祖母から聞いた話」



わたしの、祖母の一番上の姉は、戦争がおわる2年前にうまれたそうです。わたしの祖母は、6人兄弟で、一番上の姉とは11才差です。

祖母はなにも戦争のことはなにも知らないそうですが、祖母の母、わたしにとっては、ひいばあちゃんから、聞いた話では、田舎でも空しゅうがひどかったそうです。

自分を守るための、ぼうくうごうがいくつもあって、そこに、にげていたそうです。また、一生けん命つくったお米など、日本の兵隊さんたちに、おさめていたそうです。

また、祖母の父、わたしにとってはひいじいちゃんは、兵隊さんの健康診断を受けたけど、重度のぜんそくをもっていたので、兵隊さんには、なれなかったそうです。

今は、ひいばあちゃんや、ひいじいちゃんはもう亡くなってしまったけど、祖母の姉は
いまでも、元気で生きています。

祖母から話をきいて、やっぱり戦争は、たくさんの命をうばい、たくさんの人をこまらせ
たり、人をかんとんに、きずつけられる、こわいことだと、あらためて思いました。

「空襲について」



1945年(昭和20年)6月中旬沖なわを完全に制圧した米軍は、本土上陸作戦に備え人口5
万人以上の中小都市都城宮崎延岡をふくむ137都市への焼夷弾による無差別じゅうだん爆
撃(ジェノサイド)をかいししました。都城大空襲は広島に人類初のげんばくがどうかされ
た同じ日の8月6日でした。この日は午前8時頃2機のロッキード偵察機の飛来からはじ
まりました。丁度昼頃沖なわの飛行場をとびたつた米軍の中・小型爆弾機八機が末吉・高
之峰方面から超低空で侵入し機銃掃射を行いながら市西部地域に焼夷弾をつぎつぎに投下
しました。たちまち大火災をひきおこし猛火は市街地中心へもえひろがりました。第二波
攻撃は約1時間ごとに36機が市民の退路を遮断する狙いもあって風上の北部地域に焼夷弾に
よる無差別絨毯爆撃を行いその後十分間隔で第三次第四次と来襲し市郊外の施設を攻撃す
るかたわら、消火活動を妨害するために上空を旋回しながら機銃掃射をごご四時頃までく
りかえしました。焼夷弾の直撃で即死した人、火の海に囲まれ焼き殺された人、にげると
ちゅう機銃弾をあびた人、いっしゅんにして57名の生命を奪いました。そして松元、牟田
、宮丸、八幡、姫城、上町、中町、大王、平江、栄町などの市街地としやくしよ明道小都
域中学など五校をはじめ、びょういん工場ハしょう護寺等も焼失し罹災家屋は全戸数の18
%に。罹災人口は全人口の3わりちかい17,248人にのぼるまさにジェノサイドみなごろし
爆撃でした。なおこの日は軍の兵舎や糧○倉庫になっていた庄内小学校も空襲された庄内
小学校と72戸の民家が焼失しました。この他グラマン艦載機や沖縄基地の中・小戦闘爆撃
機による爆撃と機銃掃射等により十七名がぎせいになりました。5月3日11機出撃し爆弾
30.1トンを曇天のためレーダーで投下した。5月8日20機出撃しばくだん15.8トンを曇り
で視界わるくレーダーで投下した。5月11日11機出撃しばくだん29.5トンを曇りで視界
わるくレーダーで投下した。B-29による都城爆撃は4月26日から5月11日までの15日間
にのべ123機来襲し爆弾約350トン250キロ爆弾換算で約1400発を投下し西飛行場からの
特攻機出撃を不可能にしました。このことは25日以降の特攻機が東飛行場から出撃してい
ることがそのことを裏付けています。何より重大なことは子供18人をふくむ28人の市民
の命が奪われたことです。しかも曇天で視界がわるくレーダーによる投弾によるものでし
た。なお飛行場周辺の被害も大きく4月29日の爆弾だけで蓑原や和田部落で約100戸の家
屋と牛馬が被害を被っています。市民は連日の高空通過によるウオンウオンという腹をえ
ぐるような爆音できょうふに落し入れました。沖縄戦1945年4月米軍が本土上陸作戦のた
めの準備基地の確保を意図して沖縄本土への上陸を開始したのにたいし現地の第32軍は南
部の洞窟陣地帯にたてこもって頑強に抵抗。海軍も多数の特攻機を出撃させた。

【感想】

昔の人たちは苦しい思いをしてげん在に命をつなげて亡くなっていくところがかわいそ
うだと思いました。

(聞き手：喜多樹里)

「じいちゃんのお兄さんが戦争に」



うちのじいちゃんのお兄さんは、18才でたいへいようせんそうにいき、ブーゲンビル島で23才でせんしました。

上長飯・一万城・広原地区ではまい年10月にこたか神社で戦没者いれいさいがおこなわれれています。

【感想】

びっくりした

(聞き手:上長飯小学校 近沢幸世)

「すべてが奇跡の命」



みなさんは知っていますか。子犬を抱き笑顔で写真を撮る少年兵が、翌日には沖縄の海で亡くなっていったことを。幼い我が子が読めるように、出撃前に、カタカナで手紙を残したお父さんがいたことを。

私は、今年、学校の授業で戦争について学びました。私は今まで戦争は広島、長崎の原爆のイメージが強く、ただただおそろしいものという印象で、どこか目を背けていました。しかし、犠牲に合った方々や今もなお、悲しみが残る遺族がいる現状に、私はこの実際に起きていた惨劇を知らなければならぬと強く思いました。

今日まで、戦争に関する本や資料を読み、テレビ局や市役所などの機関に協力をもらいながら、私なりに、「戦争と平和」について調べてきました。

今から74年前の8月15日、日本は長きにわたる戦争に幕を閉じました。軍人約230万人、民間人約80万人もの尊い命が犠牲となりました。ここ都城でも、空爆があり、亡くなった方もいたそうです。私は、今安全に生活することができていますが、この近くでも命の危険が迫られていた現実がありました。

戦争が終わり、今の日本は平和な世となったはずですが。しかし、本当に先人たちの望んだ未来になっているのでしょうか。未だに世界には戦争が続いている国があります。

戦争から得られるものは全て暗く、つらいものばかりです。私たちはこの悲しい過去を繰り返してはいけません。

人は一人一人違います。肌の色や言葉、文化、考え方は十人十色です。ただ一つ同じなのは、一人一人の命は尊いものであるということです。お互いがお互いを理解し、認め、手を取り合うことが大切だと思います。では、平和な世の中にするために、私に何ができるのでしょうか。調べ活動を通して、考えたことがあります。

一つ目に、戦争について学んだことを周りの人に伝えていくことです。伝え続けていくことで、過去の悲惨な出来事を心にとどめながら、戦争は絶対にしてはいけないものであることを一人一人が考える必要があると思います。私が得た知識を、周りの友達や家族に伝えていきたいです。

二つ目に、お互いを認め合うことです。例えば、話し合いの時に、自分の主張を伝えるだけでなく、相手の意見をしっかりと聞くことです。これまでの私を振り返ると、自分の意見を押し通し、周りのことを考えないことがありました。相手を尊重することは、争いをなく

すことにつながると思います。だから、私は友達のことをしっかり聞いて、お互いを尊重し合える関係を築いていきたいです。

そして三つ目に、今ある自分の命を大切にすることです。戦争について調べる中で、私の曾祖父は戦争で亡くなったことを知りました。私は、戦争で犠牲になった曾祖父がいたからこそ、今、この地に立っています。曾祖父のことを知り、自分につながったこの命の重さを知りました。

曾祖父は戦死する前に遺書を残しています。その中には、まだ見ぬ我が子へ残した手紙がありました。その一部を読みます。

「父は大陸の土になろうとも、父の霊は永くその方と共に有り、その方を守るであろう。どんなときも卑屈にならず、人に感謝を忘れるな。常に自己を反省して、批判し、立派な人間になれ。」

当たり前な今日は当たり前でなく、全ての命が奇跡の命なのです。私は曾祖父からもらった奇跡の命を懸命に生き、立派な人間になれるよう、今後も努めていきたいです。

(聞き手:祝吉小学校 六年 岩廣奈海)

「恒吉さんの戦争体験」



都城市在住の恒吉甫さんに聞いた体験談です。

太平洋戦争開戦当時、恒吉さんは県立商業学校に在学されていました。本来は昭和17年3月に卒業予定でしたが、昭和16年12月に繰り上げ卒業となったそうです。開戦の日から1週間もしないうちにあった卒業試験では、太平洋戦争開戦の経緯の問題が出たそうです。恒吉さんは趣味で新聞記事をスクラップしていたこともあり、回答することができたそうですが、ほとんどの学生は答えられなかったのではないかと話されていました。

卒業後は、校長先生の勧めもあり、朝鮮総督府の平城地方専売所へ就職されました。たばこづくりや塩、朝鮮人参などの栽培、アヘンの取り締まりなどが仕事だったそうです。当時の世の中は我慢強さの植え付けだったと話されていたのが印象的でした。ただ、都城にいる家族とは普通に文通できており、物資を送ることもできていたそうです。

この後、幹部候補生として朝鮮の部隊に入隊し、満州の牡丹江へ行き、満州で終戦をむかえたそうです。しかし、ここからが本当の苦労の始まりだったようです。

日本の敗戦により、満州や朝鮮にいた日本人は捕虜としてとらえられました。恒吉さんもその一人でした。収容所まで歩く途中に本隊と離れてしまうなどの経緯もありつつ、最終的には中国の八路軍へひきわたされました。八路軍の幹部の家の水汲みや風呂焚きなどをして生活していたそうですが、時には人民裁判にかけられ、銃殺されかけたこともあったそうです。こうして、数年にわたり中国で生活されていたそうです。

この間、都城に残っていたご家族は、恒吉さんの生死を知ることすらできませんでした。戦中は郵便のやりとりもできていましたが、終戦後はそれができなくなったためでした。ご家族が恒吉さんの消息を知ったのは、昭和二十五年に中国で行われた日本人大会の写真が新聞に掲載されたことによってでした。恒吉さんの父親が写真を見たところ、恒吉さんが写っており、ようやく生きていたことを知れたそうです。

無事に恒吉さんが都城へ帰ることができたのは、それからしばらく経って、昭和 28 年のことでした。都城駅に降り着いたときには、ホームが埋め尽くされるほどの多くの人であふれかえっていたそうです。駅には、恒吉さんに朝鮮への就職を勧めた校長先生（このときは県議会副議長になっていました）も迎えに来て、「俺が悪かった」と言ったそうです。

帰郷後も恒吉さんの苦労は続きました。中国にいたため共産主義者であるとの疑いをかけられ、なかなか雇ってくれる会社が見つかりませんでした。しかし、学生時代の先輩の誘いにより、中郷役場へ就職できたそうですが、お金の計算や畑の計算方法などが戦前と異なっていて困ったと話されていました。また、日常生活ではつっかけや折り畳み傘などの道具に驚いたそうです。

このような苦労がありつつ、現在まで生きてこられました。

【感想】

これまでに、学校での平和教育や祖父母らに戦争体験の話を書く機会というは私にも何度かありました。その中で聞いたのは、主に食料不足や空襲で困っていたことなど、戦時中の苦労についてでした。そのため、終戦をおかえることがそのまま平和な生活につながったとのイメージを持っていました。

しかし、恒吉さんの話を聞くと、戦後も大変な苦労をされており、終戦＝平和な生活の始まりというわけではなかったことを知らされました。特に、恒吉さんが都城に戻ってきたのちも、共産主義者と周囲の人々から疑いの目で見られ、就職もなかなか決まらなかったという話には驚きました。終戦から何年も経っていたはずなのに、人々の生活に戦争がここまで影響するものかと思いました。一方、それほどまでに大変な経験をされながら、過酷な状況生き抜き、人生をたどってこられた恒吉さんに敬服します。おおげさな言い方ではなく、「今生きていることが奇跡」という方の話を聞く機会を持ててよかったですと思います。

戦争は日本や世界の歴史の中でも、負の側面の強い出来事です。しかしこういった出来事があったにもかかわらず、今の私たちが平和な生活を送れているのは、こうした人生の諸先輩方の苦労や努力によるものだと感じました。戦争を「なんとなく昔のこと」と片付けずに、今の社会があるのはそれを経験してきた人々の努力の積み重ねであることに感謝して、次に自分にできることは何かを考えながら生きていきたいと思いました。

（聞き手:公務員 26歳 中嶋愛）

（体験者:恒吉甫 95歳）

「安藤高幸さんの戦争体験」



終戦当時は安久国民学校3年生の9歳でした。

戦争中の学校は、木造校舎で、電気や水道もありませんでした。子どもたちははだして生活していたので、校舎には足洗い場がありました。贅沢は敵だといって、戦争に勝つまではほしがらないように教えられていました。お母さんたちは、やりでわら人形をつつく訓練をしていました。

戦争は日に日に激化していき、都城でもたびたび空襲がありました。都城では3月18日から空襲が始まりました。空襲から逃れるために、学校にも、自分の家の庭にも、道路沿いの山にも防空壕を掘りました。しかし、安久温泉手前の国道すじの防空壕を掘るときには、土砂崩れで兵隊さん2人が犠牲になりました。

空襲に備えて、どこでも生死が判別できるように、頭巾と着ている服に名札をつけていました。また、空襲警報がなった時には、土手の下やくぼ地の溝に、目と耳と鼻を両手でふさいでかくれていました。近所には、神戸などの空襲がひどかった地域から疎開してきた子どもたちもいました。

都城でも空襲が激しくなり、終戦間際の8月6日には大空襲がありました。被害を受けたのは今の市内中央部ですが、遠く離れた中郷からでも炎が見えるくらいの激しい空襲でした。

戦争が終わってからは、何もかもが新しい制度になりました。国民学校から小学校へと変わり、男女共学になりました。しかし、衛生状況はよくなく、頭からDDT殺虫剤を散布してのみやしらみを駆除したり、海藻汁を飲んで体の中の虫を駆除したりしました。

生活が落ち着いてきたのは、終戦から10年経ったころでした。

(令和2年6月18日 都城市立西中学校での講話より)

「わたしが聞いた戦争の体験談」集

発行 2020年7月4日

発行者 都城市教育委員会

宮崎県都城市姫城町 6-21

編集 都城市教育委員会文化財課

宮崎県都城市菖蒲原町 19-1